英語で遊ぼう
~Let's play in English~

秋田保育所（ひまわり保育園）
執筆担当者：片岡祐子　佐藤友美　石井智子
キーワード：英語に親しむ　心身の成長　保護者の意識の変化

Ⅰ．はじめに

我が園は秋田大学に近いこともあり、これまで様々な国籍の子どもが入所してきた。現在在籍しているオーストラリア人の保護者より、「子どもたちに英語に触れる機会を作ってあげたい」と申し出があり、遊びながら生の英語に触れられればとの思いで実施することとする。

実際行ってみると英語を楽しむだけではなく、子どもの反応や興味関心は保育士の意図する方向とは異なることも多かったが、逆にそれが新鮮であると保育士が受け止め、広い視野を持つことで、子どもの自発的な活動へと展開することができた。

保育士が固定観念を持たず、子どもの発達や興味関心に柔軟に対応していくことで、子ども主体の研究になるのではないかと考え進めていくこととする。

Ⅱ．研究の目的

・英語に自然に親しむ中で、気づきや発見に共感し、子どもが主体となった遊びへと広げていく。
・「英語で遊ぼう」の活動から見える、子どもの成長と保護者の意識の変化に着目する。

Ⅲ．研究の方法

・年に数回、以上児を対象に「英語で遊ぼう」の時間を設け、体を動かしたりゲーム遊びをしたりする中で、自然な形で見たり聞いたりしながら生の英語に触れ親しめるようにしていく。
・年齢や個々により反応の仕方や受け止め方、興味の持ち方などが異なるため状況をみて柔軟に対応していくようにする。
・子どもの自発的言動から疑問や興味関心などを大切にし、欲求を満たすことができるよう英語という枠にとらわれず、保育士が援助し環境やきっかけ作りをしていく。
・子ども達の姿や気持ちの変化を追いながら、保護者の反応や家庭での様子もまとめていく。

Ⅳ．事例と考察

【事例１　～遊びの中から～】

第一回「英語で遊ぼう」が年長、年中児を対象にスタート。簡単なあいさつ、自己紹介、その日の天気などのやりとりから始まる。「これから何が始まるのだろう！？」とキラキラと目を輝かせ、好奇心いっぱいの表情で参加していた子ども達であった。

最初は聞きなれない英語に圧倒され、戸惑っていた子もいたものの、コリン先生の

両手を大きく動かした天気の表現の仕方、また、表情豊かな話し方など全身を使った表現の仕方にどんどん引き込まれていったようであった。初めて体験する世界に、次第に子ども達も手をあげたり、身振り手振りをつけて真似して話すようになったりと普段とは違った子どもの一面も見られ、うれしい驚きとなる。１時間程度の短い時間だったが、「たのしかったー！」「またやりたいー！」などの声があちらこちらから聞かれた。

＜エピソード　～くもりって？？～＞

「英語で遊ぼう」がスタートしてから、クラスでも朝の会の中で英語での天気のやりとりをしている。

ある日の朝の会での子どもとの会話。

保「今日の天気は？」

K「くも～り～！」

保「そうか…。くもりはまだコリン先生に聞いてなかったね～。今度、聞いてみようか。」

K「うん！！」

その後、くもりの言い方を教えてもらい、くもりの日には、はりきって「Cloudy！！」と、大きな声で答えるようになった子ども達である。

その後、「かみなりってなんていうんだろう？」「台風は？？」など他にもたくさんの天気があることに気づいた子ども達だった。

考察１

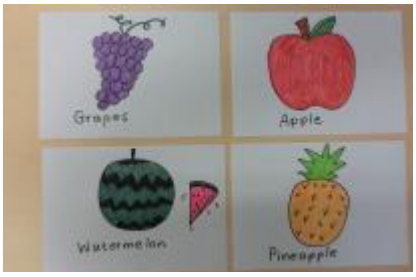
朝の会で毎日天気について話していた子ども達が、「英語で遊ぼう」で天気の言い方を覚え、朝の会でも「sunny」「rainy」と言うようになっていた。くもりの言い方を聞いていなかった子ども達は、英語の言い方を知りたいと思うようになり、コリン先生に聞く場を設けていった。

英語の言い方だけでなく、天気には色々あることに気づく。雪、台風、雷、大雨など天気に関する興味もどんどん広がっていった。

また、日常の中で疑問に思ったことや、知りたいと思ったことなど、そのままにせず、その都度一緒に話したり調べたりすることで、子どもの探究心を満たしていくことができたと思われる。

【事例２～カードを作って遊ぼう～】

「英語で遊ぼう」を始める前に、子ども達自身も準備から参加することでさらに期待を膨らませればということで、カード作りをすることにする。友達と一緒に会話を楽しみながら取り組む姿が見られた。



＜エピソード　～何色にする？～＞

自分で好きな動物・果物のカードを選び、色をぬっていく。

子ども同士で「何色ぬる？」「黄色！」「Red かな～。」など、やり取りを楽しみながら製作していた。何気ない会話の中に、

自然に英語をまぜながら話していることに驚く。

その後は、自分たちで色ぬりをしたカードを使い、ゲーム遊びを楽しんでいった。

子ども達は、次々とめくられるカードを食い入るように見ながら、得意気に大きな声で「apple！」「banana！」「grapes！」とリピートし、積極的に楽しむ姿が見られた。

考察２

事前にコリン先生と「英語で遊ぼう」をどのように進めていくか話し合う中で、使う物を子ども達が自分で手がけることでさらに英語に興味関心を持ってもらえるのではとの話がでた。

実際、製作過程の中での会話で自然に英語を口にする子ども達の姿を見て、いつのまにか身についてきていたことを実感し、嬉しく思った。自分達が作った物を使うことで、より一層興味を持ち楽しむことができたと思われる。

【事例３　～保護者から～】

「英語で遊ぼう」を始めてから、家庭での話題が増え、子どもからいろいろな言葉や発音などを教えられたりと、やり取りを楽しむ機会が多くなったとの話がきかれるようになる。また、園でコリン先生と一緒にどのように遊んでいるのか、実際の姿を見てみたいという声も聞かれていた。

＜エピソード　～クリスマス会にて～＞

「子ども達が英語で遊ぼうを行った日は家庭でもその話題でもちきりになる」との保護者の声から、実際にその雰囲気をみてもらえたらと、クリスマス会で「英語で遊ぼう」の時間を設ける。

当日はあいさつから始まり、果物や動物などの絵を見て答えたり、ジェスチャーゲームをしたりする。

コリン先生が動物のジェスチャーをすると、ほとんどの子どもが元気よく「はーい！はーい！」と手をあげ、答えていた。

また「今度は、ジェスチャーをしたい人？」の声かけに、大勢の子どもが積極的に手をあげ、やりたいとアピールをしていた。当てられた子どもは恥ずかしそうにしながらも、保護者の前でも堂々とジェスチャーをし、答えてもらうと喜ぶとともに、誇らしげにしていた。

短い時間ではあったが、親子で楽しいひと時を過ごすことが出来た。

＜エピソード　～スーパーにて～＞

保育園の帰りにスーパーで買い物をしたときのこと。じゃがいもを見て

T「potato だ！」と発音した T 君。

母「すごい！じゃがいもってポテトって言うんだ～」

T「ちがうよ！potato だよ！」

英語の発音は、普段私たちが言っている「ポテト」とは、全く違う言い方になる。その違いを子どもなりに理解し、自信満々に母に発音を教える姿に、ほほえましく思うと同時に、「英語で遊ぼう」を楽しんでいるんだな～ということを実感した出来事だった。

考察３

子ども達は何度も楽しみながら繰り返し体験することで、色々な単語を言えるようになったり、正しい発音を身につけたりし、いつのまにか成長していることを感じた。そのような姿を保護者とともに喜びあったり、家庭でも会話が増え、親子の触れ合いのひとつのきっかけになっていることを知り、嬉しく思った。

クリスマス会では、保護者がたくさんいる前でも、いつの間にか物おじせずに話したり、率先して手をあげ全身を使ってジェスチャーをしたりと、子どもなりに様々な表現や意思表示ができるようになっていることを知った。言葉を覚えるだけでなく、積極性が身に付くなど知らず知らずのうちに成長していることを感じた。

【事例４　～異文化への広がり～】

「英語で遊ぼう」を楽しむ中で、コリン先生がオーストラリアにいたことを知った子ども達。「オーストラリアってどこにあるのかな？」という言葉がでてきたことで、保育室に世界の絵本を置いたり、世界地図や国旗、世界のあいさつなどのポスターを貼ったところすぐに興味を示し、釘づけとなった。

＜エピソード　～世界って広い！！～＞

―世界地図を見ながら―

Y「オーストラリアってコアラいるんだよね～」

I「オーストラリアって日本の下の方にあるんだって！！」

―世界のあいさつのポスターを見て―

T「C ちゃんは中国でしょ。こんにちはってニーハオって言うんだね」

A「同じこんにちはでもいろんな言い方があるんだね！！」

世界にはいろいろなあいさつがあることを知り、さっそく隣のクラスの中国人の子を呼んで「ニーハオ！」とあいさつをしていた。声をかけられた子も嬉しそうに「ニーハオ！」と返していた。

考察４

子ども達が興味を持ったり、疑問を感じたことを受け、そのタイミングを逃さないよう、こちらからも絵本や地図などを提供し、子ども達自らの「知りたい！！」という欲求に応えていくようにした。

好奇心を持ち、自分から調べることで、子ども達の世界観がどんどん広がり、色々なことに興味関心を持つことができ、異文化への広がりにつながっていった。

【事例５　～英語だ！！～】

「英語で遊ぼう」をきっかけに様々な形で英語に触れるようになってきた子ども達。日常生活の中でも、遊びや会話の中でなど自然に英語が聞かれるようになり、子ども達を見ていると、英語が生活の中に溶け込んできていると感じられる。

＜エピソード　～発見！！こんなところに英語を見つけたよ！～＞

給食を食べているときのこと。時計を見た子どもが突然、

H「あ！英語だ！！」と言い出した。

保「どれどれ～？どこに英語？」と尋ねる保育士に、

H「ほら！あそこだよー。」と時計を指差す。

何度見ても数字しかない時計にわけがわからない保育士。

H「ほら！！１１のところがさ～、こうやって～。」

と指で時計の長針を真似てジェスチャーすると…なんとアルファベットの「N」に！！これを見つけたのは、ちょうど１２時の５分前。数字の「１１」に長針が重なり合うことで、アルファベットの「N」に見えたのだ。アルファベットの読み方は分からないが形で覚えている様子だった。こんな形でも英語に興味を持てていることに感心するとともに、子どもの発想力にも驚かされた。

考察５

日常の簡単なやり取りに加えて、子ども達は特にこちらから教えたりしたわけではないが、生活の中で視覚から得られる情報も多い。

フラッシュカードや色遊び、フルーツバスケット、絵本、手遊びなどで色々な英語に触れ楽しんでいるが、文字にまで興味を広げていることに驚かされた。

読み方はわからずとも、子どもなりに形で覚え、英語を意識するようになってきていると思われる。

体を動かして遊んだり、話したりするだけでなく、色々な感覚で興味関心を広げている子どもたちに、私たち保育士も柔軟に対応していくことが大切なのではと考えさせられた。

【事例６　～読み聞かせ～】

コリン先生が、途中、産休・育休に入ることになり、今までのように「英語で遊ぼう」の時間を設けることが難しくなる。

子どもたち自身、英語に対して興味・関心の幅を広げつつある時期であったので、

保育士としてもそんな姿を絶やしたくないとの思いがあった。そんな中コリン先生より絵本の読み聞かせをしてはどうかとの話があり、喜んでお願いすることにする。

今までの英語を使った遊びに関しても、引き続き保育士と一緒に各クラスで持続していくようにし、子ども達の興味・関心が薄れないよう心がけていくようにする。

考察６

これまでやってきた「英語で遊ぼう」が継続できなくなってしまったため、せっかく芽生えた子ども達の英語に対する興味・関心も薄れてしまうのではないかと懸念されたが、日常の遊びや、やりとりの中、また読み聞かせの機会を設けてもらったこともあり、子ども達の意識は変わることがなかったようだ。

読み聞かせでは、「はらぺこあおむし」や「メイシー」また、子どもたちが興味を持ちやすい「大きい小さい」「長い短い」など対照的で簡単な内容のものを選び、読んでくれたため、子どもたち自身も理解しやすかったと思われる。

コリン先生のジェスチャーや表情豊かな表現で読む姿に、子ども達もさらに引きつけられていたように思う。

Ⅴ．まとめ

二年目を経過した「英語で遊ぼう」は、当初保護者からの申し出ということもあり、保育士にとってはどのように進めていけばよいか見当がつかず、手さぐり状態でゼロからのスタートであった。

事前の打ち合わせと準備などを通して、子ども達が英語に触れる環境づくりを心がけたつもりだが、子どもの反応や興味は英語のみにとらわれることなく、多方面に向いていった。

生き生きとした表情で英語を話したり、日頃消極的な子どもが身振り手振りを交えてジェスチャーで表現しようとする姿を見て、きっかけは英語であったとしても、活動を通して様々な心身の成長を感じられたことは大きな収穫となったと思う。

また、日常生活の中でも「英語で遊ぼう」で見たり聞いたりしたことは、子ども同士だけではなく親子の会話へもつながっていったと思う。

現在も継続して取り組んでいる「英語で遊ぼう」は続けてきたことによって、見えてきたものもある。

年度が変わり、新しく進級した子ども達もまた新鮮な気持ちで体験できているということである。

今後も子ども達の小さな気づきや思い、興味関心を見逃さずしっかりと受け止めていきたい。

　そして、英語のみにとらわれることなく、子どもの自主的かつ主体的活動となるよう保育士側が意識しながら、引き続き心がけていきたいと思う。

【使用文献】

・エリック=カール著『はらぺこあおむし』
偕成社（1989）
・ジーン=ジオン著『どろんこハリー』
福音館（1964）
・ルーシー=カズンズ著
『メイシーちゃんのおおきいちいさい』
偕成社（2007）